

How To create a Movie.

映画という芸術作品は何もない0から生まれ、最初は企画書から全てが始まります。テーマやアイデアの案出し、制作の資金調達と撮影スケジュールの計画などをプロデューサーを中心に行い、ヒットさせるための計画・企画をたてます。そして映画を作るため、多くのスタッフ、クリエイターが動くことになります。

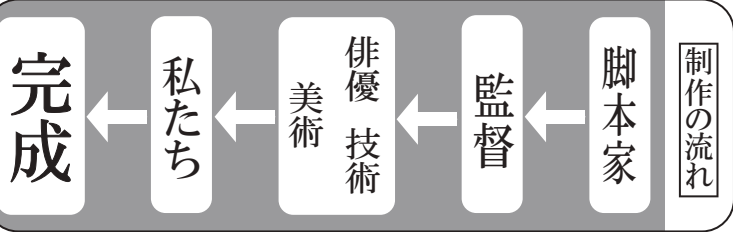
さて、映画には必要不可欠な仕事が二つあります。

一つ目は脚本の製作です。どれほど時間をかけて計画を練ったとしても映画の骨組みとなる脚本がなければ、俳優たちはどう演技すればよいか、美術・技術チームもどのようなセットを作れば良いのか、どのように編集すれば良いかがわかりません。このとき選ぶ脚本家は誰でも良いではありません。一昔前は「脚本など誰でも書ける」と言われていましたが、現在では「学んで身につく脚本技術がある」という認識になりました。各人が身につけた脚本技術は、脚本家一人ひとりの個性だと言えるでしょう。例えば、ホラー映画を得意とする脚本家なら、どんな展開で観客を恐怖させるのか、ストーリーの中でホラーな雰囲気をごどのように作り出すかが脚本家の技術、個性となり、映画の個性ともなります。

二つ目の必要不可欠な仕事は監督です。監督は、自身の頭の中にある世界に合うような技術を持つ脚本家を選び、書かれた脚本に基づいて想像する世界を作るために俳優の選出や、撮影場所・方法の決定など脚本家が作った骨格に肉付けをしていき、映画という作品を目に見える形にしていきます。

さあ、準備ができれば撮影の開始です。脚本家が書いた骨格である脚本に基づき美術チームが作ったセットを使って監督が、映画のイメージに合うように俳優たちにしてもらいたい演技を説明したり、カメラマンにどのような角度で撮影してほしいかを指示して全体の動きをまとめます。その指示されたカメラマンが撮った映像を技術チームが編集し、最後に制作陣全員で作った映画を確認し、気になるところを修正していきます。修正が終わっても、映画はまだ完成していません。こうして作られた映画が最後の制作者である観客、すなわち私達のもとに届けられます。観客である私たちが映画を見て楽しんだり、驚いたりして評価することで映画は本当の意味で完成し、一つの芸術作品としてこの世に残り、時空を超えて楽しまれていくのです。

ここでは映画ができるまでを簡単に紹介しましたが、実際にはより多くの細かく重要な作業や映画を作る際の協力者が存在しているのです。（ ）＊4



.....

THE MONEY

＜制作＞一般的にヒット映画と言われる映画一本あたりの制作費用はどのくらいだと思いますか。答えは約3.5億円。日本で一生を過ごすのに必要な費用と同じくらいです。それほどの金額を使っている訳ですから、一つひとつの作品に制作会社の命運がかかっていると言えます。

＜配給・上映＞さあ、映画を作り終えました、となると当然映画館で上映されるのですが、映画館はタダで映像を手に行っている訳ではありません。ここで登場するのが配給会社です。東映、東宝などがこれに当たります。映画の配給とは、配給会社が制作会社から映像を買い付け、それを映画館に販売するという一連の流れのことです。しかし、配給会社を通さずに映画館が直接制作会社から買えば良いのでは？ と思う人も居るでしょう。実は配給会社には、テレビや映画館で広告をしたり、映画の上映スケジュール管理を手助けしたりといった仕事もあるのです。配給会社がこれらの働きをしてくれていることで、私たちはより映画を見やすくなっている訳です。こうして私たちは映画館に渡った映像を見ることができます。

＜広告＞映画を広告、宣伝し、世間に興味を持たせることも、もちろん映画を見もらうために重要なことです。収益を減らしたくないからといって中途半端な広告をしてしまうと、かえって利益が減ってしまいます。なので配給会社も広告には莫大な費用をかけます。具体的に、制作費150億円の映画の広告に150億円を使用したという話もあります。そこまでの費用を掛ける必要があるほどに、利益を得る上で広告は重要なのです。

＜上映後＞上映後には入場料金による収入が入る訳ですが、これを興行収入と呼びます。皆さんもニュース番組などの興行収入ランキングとして聞き覚えがあると思います。では興行収入の取り分はというと、約5割が映画館、2～3割が配給会社、残りを制作会社が、となっています。また、グッズや飲み物、ポップコーンなどは映画館に直接売上が入るそうです。このような取り分のため、制作会社は赤字になることも多く、中小規模だと倒産してしまうこともあります。

よって、映画館においては、映画以外の収入も重要なのです。（ ）＊5



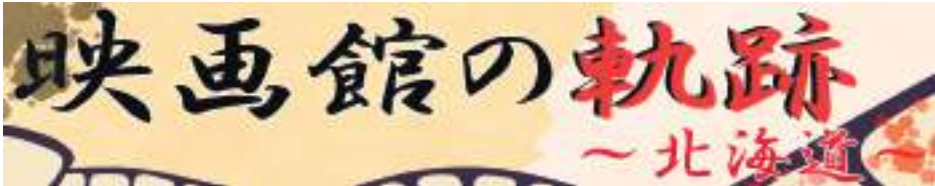
め、映画館で上映するときには、楽器演奏者がスクリーンに映る画面を見ながらオーケストラピットなどで演奏する音楽や弁士による語りをつけて観客に聞かせていた。音声のつく映画は需要があったものの、それを実現する技術がなかったのである。しかし、真空管が発明されたことによって、1926年に世界初のトーキー（talkie=talking sound）映画が誕生した。この後、音のついた映画であるトーキー映画が上映される映画館や劇場が一気に増えた。また、音響再生装置の設置が急増し、機械製造の産業が発展していく。1928年に公開されたアニメーションに音声がついた映画であるウォルトディズニー社の「蒸気船ウィリー」も、トーキー映画が普及し始めた頃の作品だ。この新たな映画の誕生を契機に映画製作の流れにも拍車がかかり、1928年にウォール街から始まった世界恐慌の不況の中でもさえも映画業界は大きく発展していくことになる。蛇足だが、筆者はディズニーの大ファンである。ウォルトディズニー社は世界恐慌の深刻な不況が続いた1930年代でも多くのヒット作を多く出しており不思議に思っていたのだが、裏には技術の革新があったと知り納得した。

この頃から映画館の集客が増え、大きな劇場が必要になった事に伴い、大規模な音響の機材の必要性も出てきた。「観客が満足できる音量」にするには、それまで開発されていたスピーカーではなく映画に特化した「トーキー映画用スピーカー」が欠かせず、高い技術が必要とするこの開発に映画産業全体が多額の資金を投じたことも技術が向上していく要因となった。

実はトーキー映画初期の音声技術、構造は映画会社によって違うことが多く、しかも複雑極まりないので、今回は万人に何となく分かってもらうために割愛させていただいた（筆者の足りない頭ではちょっと理解できなかったというのが概ねの理由である）。

歴史を辿ってみると視覚、聴覚という二つの感覚を獲得した映画というカルチャーが、近代から現代にかけて定着したのは当然のことだったと言える。まだまだ映画技術の発展は前途は拓けているように思う。（ ）＊6,7

.....



映画館。文字通り、映画を上映する施設であり、その商売の場でもある。民の間では“娯楽施設”のひとつとされ、長い間親しまれ続けてきた。本記事では、その中でも「北海道」の映画館にフォーカスを当て、掘り下げていきたい。

その歴史は、明治の末からスタートするという。1902年に、厚岸に建てられた『寿座』は、北海道の映画館の原点といえる施設だったそう。戦前にはあまり見られない、「映画館と寄席の複合施設」だった寿座は、始動と同時に北海道の映画館の始祖となった。なぜ、”映画館と寄席の両立が珍しい”のか。それは、”初めから映画館の要素を持ち合わせている”という点にある。戦前のうちに建てられ、映画館として機能した、または機能している施設のうち、初めから映画館として建てられた施設はほぼないらしい。より一般的だったのは、映画の上映より演芸の実演だったそうで、映画館のみの建物はおろか、映画館と寄席の複合施設すら建てられはしなかった。そんな時代にとって寿座は、その時代の最先端をゆく施設だったのかもしれない。

時が経って1910年。札幌市に初めて誕生した『松竹遊楽館』は、もともと寄席として建てられた施設だったそう。実演のほうで十二分に活かされていた広い舞台に加えて、客に貸し出される座布団や火鉢。そこで上映される、場違い感の否めない映画。光景を思い浮かべてみると、演芸の演目の一つに映画というものが追加されたようで、その異質感が少し面白いようにも思えてくる。

また少し時が過ぎて、1946年。戦後初の映画館は、釧路の『釧路劇場』だという。「釧路」の愛称で親しまれた釧路劇場は、戦前のような寄席スタートの劇場ではなく、完全に映画館として作られた施設だった。寄席文化の衰退という背景もよくわかる変化だが、映画文化の発展のカギにもなっただろう。また、戦後になると、急速な経済成長のためか、北海道でも、”映画を観る”という娯楽にさらに手が出されるようになっていった。それゆえに、映画を見せる側の変化も著しく、1942年に建てられた『共楽座』では、1960年に、今まで座布団だったものが椅子席に改装されたり、スチーム暖房のような近代的なものが導入されていったりした。また、1982年に建てられた『ポーラスター』のように、初めから居心地重視で建てられる映画館も増えていった。

一昔前の映画館と最近の映画館には、ひとつ決定的な違いがあった。それは、1本の映画を観る毎にお金がかかるわけではなく、”映画館に入ることにお金がかかる”というところである。つまり、一度お金を払って映画館に入ってしまうえば、そこから出るまでは何度も映画を見られるというわけである。また、スクリーンはひとつの館に、多くても片手

ここでは、映画という文化の原点に立ち還ってみよう。映画は20世紀に入ってから目覚ましく発展した文化であり、20世紀の前半には大衆の娯楽として定着したサブカルチャーである。

さて、映画フィルムの原型を作る写真機は19世紀に発明されており、この発明は後世に大きな影響を与えた。そんな写真機を、躍動感のある映像を撮影できるものにまで発展させていった過程の大元には、アメリカの発明王トーマス・エジソンが開発した「キネトスコープ」の存在がある。何かに投影できるものではなかったが、フィルムを使った初めての動く映像であった。エジソン等は映像を撮影する「キネトグラフ」も後に開発する。が、重量が非常に重いことと、何かに投影ができないため一人でしか楽しめないという欠点があった。そして数年後、映像の撮影および投影も可能な「シネマトグラフ」が、フランスのリュミエール兄弟によって開発された。そしてこの兄弟は、撮影した映像をお金をとって上映するという、現代まで続く「興行」の概念も同時に作ったのである。ここから20世紀に入り、カメラは「小型化」の追求がされていった。つまり、フィルムに撮影し、投影するという原型は19世紀末の時点で既に固まっていたのである。

「映像」ができたことによって誕生した映画は、セリフや音楽のない白黒フィルムの「無声映画」であった。このた



「観客が満足できる音量」にするには、それまで開発されていたスピー

.....

で数えるほどしかなく、その日に、テレビの番組表のごとく組まれたプログラムに沿って上映がなされていたのだという。また、ここまで紹介してきた映画館は、「単館系」という、館にあるたった1枚のスクリーンに映し出される映画を、観客全員で観るスタイルが多かった。もちろん、大きな寄席や映画館で、複数枚のスクリーンでの同時上映というのもそこそこはあった。それでも、現在主流となっている「シネマコンプレックス」という形態のものは、ゼロに等しいほど少なかった。そんななかで、その旧型たちと、現在のシネマコンプレックスの橋渡しとなったのは、1919年に建てられた『札幌劇場』だろう。札幌劇場は、初めは実演のための寄席として運営されており、1946年から映画常設館として動き始めた。そして、1995年に「シネマコンプレックス方式」をいち早く導入し、時代の最先端をゆくようになった。シネマコンプレックス方式の映画館というのは、簡単に言えば『複数のスクリーンを備えた映画館』であり、札幌劇場は7つのスクリーンを備えていたそう。ついこの間まで、「ディノス札幌中央」として存在していたビルの7階と8階に入っていたために、この劇場の存在を知っている人は多いのではないだろうか。

今回のこの記事は、『ほっかいどう映画館グラフィティー』という書籍をもとに書かせていただいた。どれだけ歴史の範囲を北海道に限定したからといって、この記事内に収まるほど浅い歴史などではなかった。そう、ここに書ききれなかった歴史が、まだまだたくさんあるのだ。月寒高校図書館に置かれているので、興味がわいた方はぜひ探して読んでみてほしい。（ ）＊8

.....

今回のこの記事は、『ほっかいどう映画館グラフィティー』という書籍をもとに書かせていただいた。どれだけ歴史の範囲を北海道に限定したからといって、この記事内に収まるほど浅い歴史などではなかった。そう、ここに書ききれなかった歴史が、まだまだたくさんあるのだ。月寒高校図書館に置かれているので、興味がわいた方はぜひ探して読んでみてほしい。（ ）＊8

.....



③映画館において最も好みの席は？		
	スクリーン	
0.0%	2.2%	0.0%
4.5%	49.6%	8.2%
3.0%	22.5%	9.7%

正面で観たい人と、人が密集している場所を避けたい人がいますね。

「映画は好きな時に、観たい場所で。」これに尽きます。（ ）